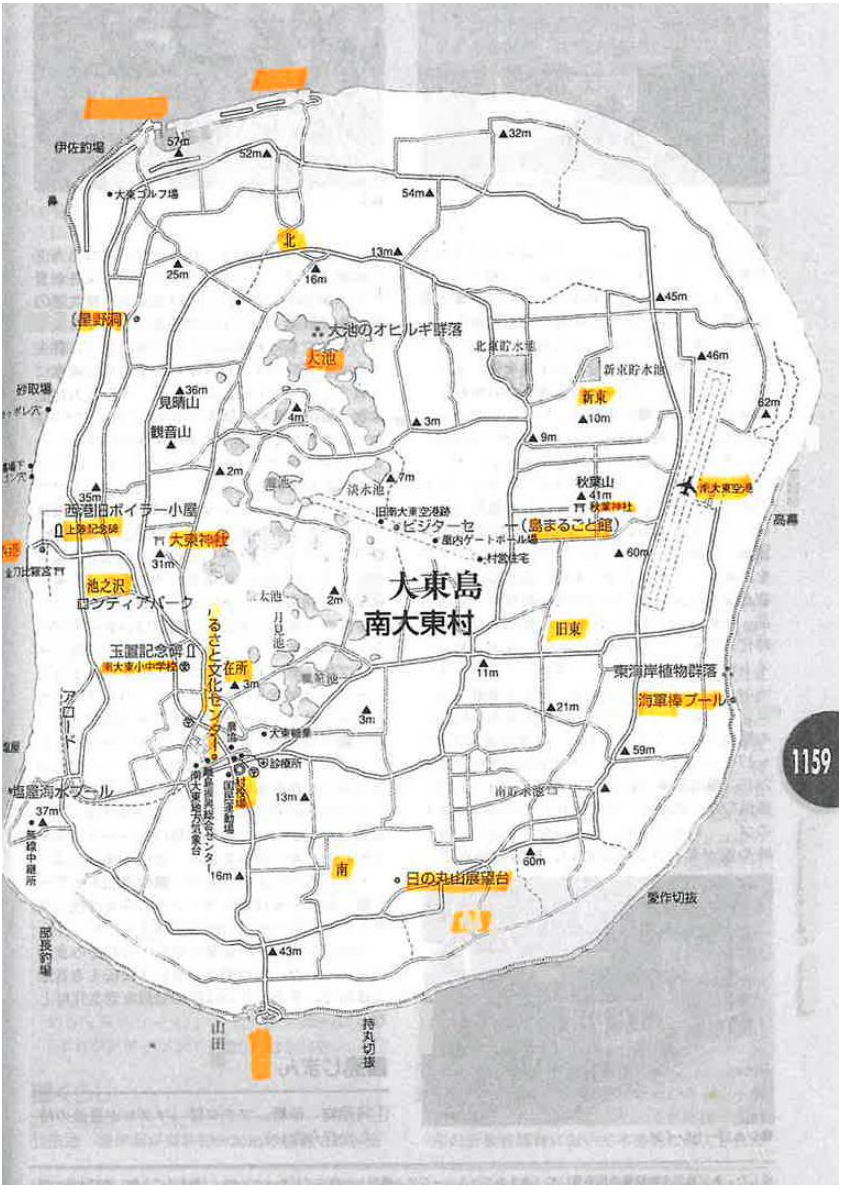
南大東島


大東島
南大東村
伊佐釣場
大東ゴルフ場
北
大池のオヒルギ群落
大池
北東貯水池
新東貯水池
新東
見晴山
観音山
西港旧ボイラー小屋
上陸記念碑
大東神社
池之沢
ロンティアパーク
玉置記念碑
新大東小中学校
ふるさと文化センター
在所
大東郵便局
診療所
塩盛海水プール
無線中継所
南
日の丸山展望台
旧東
東海岸植物群落
海軍棒プール
秋葉山
秋葉神社
ビジターセ
（島まるごと館）
屋内ゲートボール場
村営住宅
旧南大東空港跡
淡水池
新大東空港
高瀬
豪作切抜
持丸切抜
山田
部長釣場
星野洞
砂取場
伊佐
1159

二〇一七年二月二一日

環礁が隆起した島

那覇空港を九時四〇分に出発した琉球エアコミュータのプロペラ機は、一一時少し前に南大東空港に着陸した。南大東島へのアクセスは、飛行機の他に大東海運が運航する貨客船「だいとう」もあるが、五日に一便しかなく、沖縄本島の泊港から南大東島への先着便（北大東島に先に寄港するフェリーを経由便という）でも一四時間を要し、しかも冬季は荒天が多く、欠航もあるので予定がたたない。よほど時間に余裕がない限りは飛行機を利用することになる。

那覇空港と南大東島空港を結ぶ飛行機は、午前と午後の二便運航されている。午前便は那覇空港からの直行便であるが、午後便は北大東島を経由する。火、水、木曜日は南大東島に先に到着し、金、土、日、月曜日は北大東島を回って南大東島に着く。使用している機材は、午前便がボンバルディア社製のＤＨＣ三〇〇で定員五〇人、午後便はＤＨＣ四〇〇で定員は七四人と多い。

南大東島は面積三〇・五七平方キロメートル、周囲二一・二キロメートルの丸い島である。本島の那覇から東へ三九二キロメートルの海上に浮かぶ海洋島だ。南大東島の約八キロメートル北に北大東島、約一五〇キロメートル南に沖大東島があり、この三島を合わせて大東諸島と呼ぶ。なお、沖大東島にはかつてリン鉱石の鉱山があり、ラサ工業という会社が採掘していたが、今は無人島になり、米軍の射爆場として使われている。リン鉱石を採掘していた当時は、約五〇〇人の労働者が雨水を利用して生活していた。この沖大東島は北大東村に属し、島の所有者であるラサ工業㈱は同村に固定資産税を納めている。

飛行機の窓から島が視野に入ってまもなく滑走路に入ったので、上空から島を観察する時間はほとんどなかったが、平坦な地形の島のほとんどがサトウキビ畑で覆われていた。空港には小さな売店と喫茶店があるだけで、飛行機が到着する午前と午後に僅かな時間オープンする。空港には「ホテルよしざと」のワンボックスカーが迎えにきていた。島にはタクシーもバスもない。空港から宿までは、宿の車が頼りである。荷物の到着まで少し待たされた。車には七人ほどが乗り、満席となり、島の西側にある宿に向かった。ちょうど島を横断することになる。

南大東島は今から約四八〇〇万年前に現在のニューギニア諸島付近に火山島として誕生し、火山活動の停止とともに島は水面下に沈み、やがてサンゴ礁が形成された。島はフィリピン海プレートの移動とともに北上、その後サンゴ礁が隆起して現在

の島が誕生した。島は環礁だったので、島の周囲は高く盛り上がり、島の内側は凹んでいる。つまり周囲に外輪山をもつカルデラのような地形なのだ。外輪山と盆地の境の崖を地元では「ハグ」と呼んでいる。八丈島の方言で盛り上がったという意味で歯茎を意味する。文字では「幕」と書く。島の中央部の盆地にはたくさんの湖や池がある。こうした島の生い立ちは世界的にも珍しく、北大東島を含めて世界に一〇数例しかないといわれている。

南大東島に通う琉球エアコミュータのプロペラ機

島は、在所、北、新東、旧東、南、池ノ沢の六つの地区（字）で構成されている。家がかたまり集落を形成しているのは在所でのみで、その他の地区は家が散在し、集落を形成することはない。

一〇分ほどで、在所にある「ホテルよしざと」に着いた。島の行政機関が集中する中心部に位置する。「ホテルよしざと」は観光客が泊まるホテル部門と仕事客が泊まる民宿部門に分かれている。民宿部門が先にでき、その後ホテル部門ができた。当日、ホテルの方は観光客の予約でいっぱいで、予約した時点で民宿の方に回されていた。一一時二〇分にチェックインする。ロビーには南大東島に関する本が売られていたので、『南大東島自然ガイドブック』（八〇〇円）、『南大東島まるごと宝マップ』（三〇〇円）、『南大東島の人と自然』（二四〇〇円）の三冊を購入する。民宿は四畳半の部屋で、小さなテレビと机、布団が置かれているだけだった。荷物を部屋に置き、ホテルで自転車を借り、外に出た。

在所

在所は南大東島の中心地であり、島のほとんどの公共施設が集中している。最初にＪＡおきなわ南大東支店に併設されているＡコープをのぞいて商品をみるが、特段珍しいものはない。ついでに沖縄を代表する野菜であるゴーヤ、トウガン、ナーベーラー（へちま）の種子を購入した。昼食の時間だったので食堂を探すが、沖縄そばの店は休みだった。近くにあった「太陽ぬ家」（沖縄の方言でティーザヌヤ）で、自家製のカレーパン、シュークリーム、南瓜饅頭とコーヒーを購入。店の脇に置かれていた椅子に腰かけて食べる。

ＪＡの事務所の前に、「水を大切に！」と書かれた大きな給水塔が置かれていた。隣に古くなった小さな給水塔が並んでいる。島には礁湖にできた多数の湖や池があるので、井戸を掘れば水が出た。島の人々は集落の周辺に井戸を掘り、水を確保した。しかし、生活が豊かになるとともに水の需要は増大する。一九八九年に簡易水道が整備されたが、増え続ける水需要に対応するため一九九〇年には海水淡水化施設がつくられ、ここで造水された水が給水塔にポンプアップされて全島内に供給されている。この淡水化施設は村役場から東に少し歩いたところにある。

その前に島内の電力を担う沖縄電力の南大東電業所があった。内燃力（ディーゼル）の発電所である。南大東島の全域に電灯が灯ったのは一九七〇年のことだった。一九七一年には村営発電事業が二四時間送電を開始し、一九七二年三月にはこの発電事業を琉球電力公社に移管、その後の沖縄県の本土復帰により沖縄電力が島の電力供給を担っている。

星野洞と亀池港を結ぶ道路と、空港と塩屋海岸を結ぶ道路の

「水を大切に」と書かれた給水塔

交差点を中心に、北東側には郵便局、診療所、保育園、南東側に南大東村役場と消防署、南西側に国民運動場、北西側にテニスコートと体育館が固まっている。この一帯が島の中心地である。

在所は公共施設と製糖工場を中心とする小さな町であった。サンゴの石でつくられた戦前の古い建物がいくつもある所をみると、在所は開拓当時からの島の中心地であったにちがいない。製糖工場の西側には社員住宅、歯科診療所（地元では「はーや」と呼ぶ）、南大東島地方気象台、離島振興総合センターなどもある。

沖縄電力の南大東電業所

大東糖業

南大東島の基幹産業はサトウキビ栽培と製糖業である。南大東島の歴史は、一九〇〇（明治三三）年に八丈島出身の玉置半右衛門が派遣した二三人が苦難の末に南大東島に上陸し、入植したことに始まる。玉置は一八八七（明治二〇）年に鳥島を開拓して羽毛の採取に成功し、巨万の富を築いた事業家であった。その後、鳥島に次ぐ次の資源を求めて南東諸島に着目、一八九八（明治三一年）に大東諸島を発見し、この島の開発をめざした。玉置は小笠原諸島の開拓に参加した時の経験から、この島にはサトウキビが適していることを知っており、沖縄本島のサトウキビ約一〇〇〇本を開拓団に携帯させたらしい。

上陸した開拓団はアダンやビロウの木を伐り払い、農地に開墾し、持参したサトウキビを植えた。上陸後二年後の一九〇二（明治三五）年には、黒糖八〇俵を生産している。その後、サトウキビ畑は島全土に拡がり、製糖業も順調に発展したが、島

の製糖業の担い手であった玉置が一九一〇（明治四三）年に亡くなると、後継者に恵まれなかったこともあり、南大東島の製糖事業は一九一六（大正五）年に東洋製糖㈱に引き継がれた。これまでは含蜜糖（黒糖）を生産していたが、一九一八年には分蜜糖工場に変わった。その後、一九二七年には東洋製糖と大日本製糖が合併して、島の経営は大日本製糖㈱に移ったのである。

戦争中は陸軍三六連隊の守備隊が駐留し、三〇〇〇人ほどの兵士が配置された。兵士の食料を確保するためサトウキビ畑はサツマイモ畑にかえられ、製糖業は中断することになった。戦後の一九五〇年に現在の大東糖業㈱が設立され、サトウキビ栽培と製糖業が復活した。同社の本社は那覇市内に置かれていて、事業所は南大東島のみである。なお、隣の北大東島は別会社になっている。

一二時半ごろに大東糖業㈱南大東事業所に顔を出すと、昼休みだったこともあり社員が一人しかいなかった。玄関への通路脇には来社した政治家の名前を書いた白い木柱が立っていた。このうち国会議員は小泉進次郎、西川公也、岸田文雄、宮腰光寛氏の四氏である。工場の大きな煙突には、でかでかと「さとうきびは島を守り、島は国土を守る」と書いてある。おそらくＴＰＰに参加すれば、「島の産業は滅び、そして日本という国も守れなくなる」と、島を訪れる政治家たちに訴えることが目的だったに違いない。

そのうちに総務の玉置さんという責任者が事務所に戻ってきた。工場見学を申し出たが、あらかじめ予約していないと無理とのこと。代わりに工場の生産プロセスを書いた資料をいただ

大東糖業㈱の製糖工場

いた。工場での製造工程を簡単に紹介しておこう。

トラックで搬入されたサトウキビは計量後、キビの割合と糖度を調べる。その後デトラッシャーという回転機に入れて土砂を分別、さらに扇風機で葉や草などの軽いものを取り除く。これらはトラッシュと呼ばれる夾雑物で、バカスやケーキと混ぜて畑に還元する。きれいになったサトウキビはカッターで切断され、さらにシュレッダーで細断される。これを圧搾機に入れ、水を掛けながら絞り、糖汁を得る。糖汁の上澄み液を五重効用缶に移して段階的に濃縮する。濃縮液はシラップと呼ばれ、これを遠心分離器にかけて糖蜜と結晶（原料糖）に分離する。

製糖工場の操業は、平年であれば一～三月の三カ月間であるが、今シーズンは豊作なので一二月から始まり、四月中旬まで操業する予定だという。島には川がないので水は雨が頼り、したがってその年の降水量の多少と台風の来襲頻度がサトウキビの収量を左右するという。最近のサトウキビの収穫量は五万トンほどであるが、今年は倍の一〇万トンが見込まれている。

製糖期には約八〇人が工場で働いている。周年雇用の社員は三五人なので、残りの四五人は季節工である。二交替勤務で、工場はシーズン中休むことはなく稼働している。季節工の主な出身地は北海道で、この人たちのために宿舎が用意されている。

分蜜糖は一二日に一回の頻度で島外に出荷されている。主な出荷先はフジ日本製糖㈱で、船で運搬され、横浜港と千葉港に陸揚げされている。

南大東村役場

一三時を回ったので、南大東村役場を訪ねた。庁舎は二階建てで、消防署が隣接している。総務課で、村政要覧、人口のデータ、地図を入手する。さらに産業課で、農業と漁業の生産などに関する最近のデータをいただいた。産業課では林業係の人が対応してくれた。隆起サンゴ礁の島で林業とは不思議だが、サトウキビ畑を開墾したことにより樹木を伐採、その反省からすでに一〇〇年ほど前から植樹活動が行われきた。この活動が引き継がれて、今でも計画的な植林が行われており、これを担当しているのが林業係である。

南大東島は、上述したように玉置商会、東洋製糖㈱、大日本製糖㈱の企業が私有する島だった。戦後、アメリカの施政権下に置かれ、村制が施行されたのはじつに一九四六（昭和二一）年のことであった。ようやく七〇周年を迎えたばかりで、日本で最も新しい村の一つなのである。村制の施行と同時に会社経営だった私学校が公立校となり、沖縄民政府大東支庁、警察署、

郵便局、診療所が設置された。

戦後の島の人口は一九六〇年の三五一三人がピークで、その後減少し続け、二〇一五年国勢調査時の人口は一二七七人であった。世帯数は戦後ほぼ一貫して六〇〇戸前後で推移し、近年はむしろ増加しており、同年の国勢調査時は六六二戸と戦後で最も多かった。つまり一世帯当たりの人口は年々減少し続けているわけだ。南大東島には高等学校がないので、高等教育が普及した今日では、島の中学校を卒業する一五歳になると、全員が島を出ることになる。そしてそのまま島に戻らないケースが圧倒的に多く、このことが世帯当たりの人口減少に拍車をかけている。二〇一七年二月末現在の住民基本台帳上の人口は一二七五人、世帯数は六五五戸であった。

南大東村役場の建物

島は六つの字で構成されることは先に述べたが、それぞれの字別の人口と世帯数は次のとおりである。

南：一四一人（七五戸）、旧東：一四三人（五六戸）、新東：四三人（二五戸）、北：一〇一人（五五戸）、池之沢：一九七人（一〇五戸）、在所：六五〇人（三三九戸）。

ちなみにそれぞれの字名は島の方角を示している。新東は島の東側の北部、旧東は島の東側の南部、そして池之沢は島の西部で最初に開拓民が住んだ地域である。在所は島のほぼ中心部に位置しており、島の人口の半分がこの地域に住んでいる。

二〇一〇年国勢調査時の就業者数は人口の六〇・二パーセントに相当する八六八人であった。このうち農業が二一七人で最も多く、サービス業の二〇二人、建設業の一九八人が続く。ちなみに水産業の就業者は一二人とわずかである。建設業の就業割合は二二・八パーセントを占め、島の経済は公共工事に大き

く依存する構造が顕著である。島では港湾や漁港の整備、土地改良工事が継続的に行われており、島内には建設会社が三社ある。土地改良の事業は、国・県からの補助金が九五パーセントを占め、自己負担は五パーセントですむため、要望が高い。島の農業基盤整備は農地面積の約七割がすでに終了しているが、当分の間は土木工事の需要が続くことになる。

ふるさと文化センター

南大東村では、一九九〇年一月に『南大東村誌』を刊行している。この本の閲覧を役場でお願いすると、「ふるさと文化センター」にあると教えられた。南大東島には村立の図書館がなく、センターは図書館と民俗資料館を兼ねたような機能を備えている。

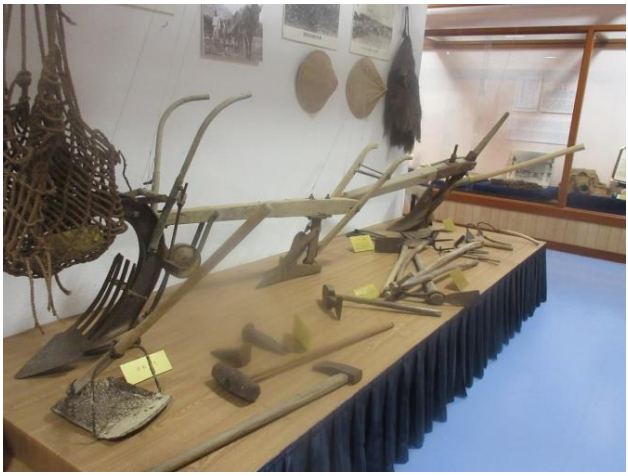
文化センターの前は芝生が張られた広場になっている。広場には第三代琉球列島高等弁務官ポール・W・キャラウィ中将の胸像と土地所有権認定記念碑が置かれていた。

南大東島は国有林だったところを玉置商会が借りうけ、原生林を開墾してサトウキビ畑を切り拓いた。開墾にあたった農民と玉置商会との間では、貸付期間が満了した後はそれぞれの土地を払い下げることが口約束されていた。だから農民は一生懸命働き、大正初期には島の全土がほぼ開墾された。しかし経営不振に陥った玉置商会は一九一六（大正五）年に東洋製糖に事業権を売り渡し、諸々の経過を経て、東洋製糖は土地の所有権も取得した。その後、大日本製糖㈱と合併したため、島の農地はそのまま大日本製糖の所有地となった。島を一つの会社が経営支配するというわが国で類例のない社会制度が一九四六年まで続いたのである。

一九五一年になると、農地の所有権は開拓民とその後継者にあるとの約束に基づき、村長以下全島民が団結して土地所有権問題を関係当局に提起し、大日本製糖㈱とも折衝してきたが困難をきわめた。一九六一年六月に時の琉球列島高等弁務官だったキャラウェイ氏が来島した際にこの問題を直訴した。キャラウェイは要請を受け入れ、島の土地問題は米国民政府土地裁判所において審理されることになり、所有権の帰属について係争が続けられた。一九六四年七月三〇日、高等弁務官の採決により当事者が合意し、一六七九ヘクタールの農地は無償で耕作していた農民に所有権が移転された。農地以外の土地は、大日本製糖㈱から琉球政府に条件付きで寄贈され、後に琉球政府から村に贈与され、村は各利用者に売り渡した。村民の悲願であった土地問題はこうして解決をみたのである。島民は土地問題の

解決に尽力したキャラウェイ中将に感謝し、胸像を建てた。

もう一つ、南大東島が生んだ国際的なオペラ歌手・粟国安彦（一九四一～一九九〇年）の胸像も置かれている。その脇に粟国が一九九〇年に書いた「インガンダルミをしっていますか」という詩碑があった。「島のことを思うときまってインガンダルミが臭ってきてその美味なる怪しげな味覚が私の幼いころを彷彿させる」と書いてある。このインガンダルミとはバラムツのことで、後述するナワキリ（標準和名：クロシビカマス）の一本釣りの時に混獲される。南大東島ではアブラソコムツも一緒にインガンダルミと呼んでいる。何れも脂分が消化できないワックスなので、食べすぎは禁物だが、かなり美味い魚である。子供のころに覚えたこの魚の味を粟国は一生忘れなかったわけだ。



ふるさと文化センターに展示された開拓当時の農機具

入場料二〇〇円を支払って、文化センターに入る。村誌の他に南大東島について書かれた文献を一通り閲覧する。引き続き、隣の資料室の展示を見た。島に残る食器、炊事道具、臼、壺などの生活用品、サトウキビ栽培の農機具などが展示されている。また、南大東島の相撲や粟国安彦に関する展示などをみることができる。そのうち先生に引率された小学生が二〇～三〇人が入ってきた。おそらく社会科の課外学習なのだろう。

シュガートレイン

ふるさと文化センターの脇に、サトウキビの運搬に使った蒸気機関車とディーゼル機関車、大八車、貨物車両、サトウキビの圧搾機の歯車などが置かれている。また南大東島開拓一〇〇年を記念して設置されたタイムカプセルもある。南大東島では

サトウキビの運搬に早くから鉄道が敷かれ、シュガートレインと呼ぶ機関車が走っていた。

玉置半右衛門は、開拓三年目に作物や荷物の運搬のための鉄道を島内に敷設している。その軌道は鳥島の例に準じたもので、運搬車は手押しの「トロッコ」であった。西線、南線、東線、北線の四線が敷設され、一九一五（大正四）年にサトウキビ畑の面積が拡張されると、更にその距離は延長された。しかし、平坦に見える盆地内部も開拓当時は起伏が激しく、手押しのトロッコでは、下りはいいが、上りはかなりの重労働であった。翌一九一六年には、玉置商会の経営を引き継いだ東洋製糖によってこれらは撤去され、新たに機関車用の鉄道の敷設が計画された。工事は急ピッチで進められ、翌年に同社はドイツ製一台、

シュガートレインを牽引した蒸気機関車

蒸気機関車の後に使われたディーゼル機関車

イギリス製の機関車二台を購入した。機関車が運航されるようになると、五トンほどの荷を積んだ台車を多い時には三〇台引っ張ることも可能になり、貨物輸送は一段と便利になった。サトウキビの工場への搬入の他に、生活物資や人の輸送にもこの鉄道が使われた。

鉄道は島を一周する一周線に、北支線、北丸山線、西線、亀池線、南支線の支線がつくられ、その総延長は約二九キロメートルに及んだ。客車や貨車を牽引したのは蒸気、ディーゼル、ガソリンの各機関車で、時代の変遷とともに代わった。しかし、自動車の発達によって鉄道の役割は一九八四年一月で終わり、以後、トラックが運送手段になる。

学生時代に今村昌平監督の「神々の深き欲望」という映画を見たことがある。南島文化の色濃い映画で、ことのほか印象に残っていた。じつはこの映画のロケ地が南大東島であったことを島に来て初めて知った。島から帰ってＹｏｕＴｕｂｅで改めて当時の映画を見た。映画のラストシーンに、サトウキビ畑を走るシュガートレインが出てくる。機関車の前を沖山秀子演ずるトリ子の幻影が走るシーンだが、往時のシュガートレインの実写が映画として残されている。

南大東漁業組合

太平洋上の孤島である南大東島は気象観測上重要な位置を占めている。気象通報でおなじみの気象庁・南大東島地方気象台はふるさと文化センターから歩いて数分のところにある。気象台に寄ってから漁業組合に向かった。交番、商工会を過ぎ、在所の集落のはずれに漁業組合があった。

南大東漁業組合は、漁業協同組合ではない。つまり、水産業協同組合法に基づく漁業協同組合ではなく、任意法人である。水協法五九条では、正組合員（年間の操業日数が九〇～一二〇日以上）二〇人以上が発起人になることを定めている。南大東島では正組合員が二〇人に満たないため、設立登記ができなかったためだろう。漁業組合は一九七〇年に設立されている。

組合の建物の脇には「夫婦松」と書かれた石碑が立ち、大小二本の大きな松が植わっている。漁業組合は、直売所と加工場を兼ねた建物とは別に組合員が集まる別棟がある。直売所の前には「時化のためお魚の販売はありません」と書かれた札がドアのノブに掛かっていた。人がいないかもしれないと、半ばあきらめながら中に入ると女性が一人いた。訪問の主旨を伝え、話を聞こうとしたが、相手はあまり詳しくないとみえ奥の方に入ってもう一人の女性を連れてきた。どうやら加工部門の責任

者のようだ。あいにく組合長は那覇に出張中で、戻るのは一週間後だという。気の毒に思ったのだろう、理事の儀間さんに連絡をとってくれた。一〇分ほどで事務所に来るから待ってくれとのこと。その間に水産加工について話を聞く。

この直売所は、組合員が獲ってきた鮮魚を島民のために販売するいわば島の鮮魚店の機能を果たしている。当日は時化で出漁できず、売る物がなかったが、一部の水産加工品が売られていた。「まぐろジャーキー」（二五グラムで三一〇円）を購入した。この他に、サワラ（標準和名：カマスサワラ）の塩漬け、味醂漬け、ナワキリのうす塩漬けなどが売られていた。

組合の女性部が加工品の製造を始めたのは一九九四年からである。この加工場では平均して五～六人のメンバーが働いているが、人手不足のため女性部以外の一般の人も雇っている。加工品のアイテムは上記以外にサワラのジャーキーもつくっている。「まぐろジャーキー」の原料はキハダとメバチだが、年間七〇〇～八〇〇キログラムを使う。加工品作りは二カ月に一回程度の頻度で実施し、一回あたりの処理量は一〇〇キログラムほどだ。原料と製品歩留まりからみて、「まぐろジャーキー」の生産量は五万パックほどになるだろう。ジャーキーのパッケージは改良を重ね、五～六年前からトレイやシリカゲルを使用するようになった。

生産した加工品は直売店や島内の売店の他にインターネットでも販売している。島外で開催される島フェアなどのイベントにも出店するそうだ。

待つこと一五分ほどで、儀間勉さんが車でやってきた。開口一番、「先ほど店で会ったね」と言われた。昼食を食べた「太陽ぬ家」で、「この南瓜饅頭はうまいよ」と言った人だった。この店は儀間さんの娘さんがやっているのだそうだ。一六時から離島ツアーでやってきた顧客を船に乗せて一時間ほど海から島を案内することになっているそうで、一五時半には組合を出なければならないという。ただ、夜は対応可能だとのこと。早速、南大東島の漁業の話を聞く。

南大東漁業組合の組合員は現在三二人である。専業は七人、サトウキビとの兼業が一五人、合わせて二二人で、残りの一〇人は土建業などの勤め人で、土日の休みを中心に漁業をしている。組合員の最高齢は八三歳、一番若い人が四一歳で、五〇～六〇歳代が中心だ。もうすぐ三〇歳そこそこの若者が後継者になる予定だという。ちなみに二〇一三年漁業センサス時の経営体数は一七、漁業者数も一七人であった。もともと南大東島は農業が盛んであったので、漁業は農閑期を中心に営まれてきた

わけだ。儀間さん本人もサトウキビとの兼業である。

南大東島で営まれている漁業は、マグロ釣りとカマスサワラのトローリング、そしてナワキリを対象とした一本釣りである。ソデイカを釣る船が一隻あったが、本人が体調を崩しており、現在は休漁中である。ソデイカの漁期は一一～六月で、島が見える範囲が漁場で一時期かなり獲れた時期もあったそうだ。

マグロ釣りは、①旗流しという従来からの漁法と、②ジギング（ＪＩＧＩＮＧ。実際にはエビング）というひっかけ釣りの漁法に分かれ、周年を通じて操業する。旗流しは大きなマグロを狙う漁法で、餌にムロアジを使う。水深五〇〇～六〇〇メートルの海域で、長さ一〇〇～一六〇メートルの道糸に五～六本の針をつけて流す。道糸の上には樽と目印の旗が立っている。一人あたりこの仕掛けを三本流す。マグロが掛かると、旗が沈む。だれの道具かわかるので、掛かっている場合は仲間が携帯電話などで知らせてくれるという。一方、ジギングは漁獲量を稼ぐための漁法で、エビの形をした疑似餌を上下し、水深六〇メートル付近からしゃくって引っかける。

マグロ類はキハダ、メバチ、ビンナガの三種類で、漁期は、キハダとメバチは四～六月、ビンナガは六～七月が中心である。ただ台風シーズンの七～八月は実質的に操業できないことが多い。漁場は主として島の周囲に設置してあるパヤオ（浮魚礁）である。この地方は台風の影響を強く受けるので、パヤオは中層に設置されている（水深一〇〇～一二〇メートルの海域の一八〇～二〇〇メートル層にパヤオを設置、チェーンで固定されている）。パヤオは沖縄県が設置したものが四基、南大東村が設置したものが二基ある。沖縄本島の漁師もパヤオを利用し

南大東村漁業組合の事務所兼直売所兼加工場

ており、県の施設なのでやむを得ないと考えているが、宮崎県のマグロ漁船が利用しているのが問題だという。宮崎県の漁船は集魚灯をつけてマグロを集め、まとめて獲っていくという。写真は証拠にならず、イタチごっこが続いているらしい。

サワラのトローリングは、疑似餌と活餌に分かれる。活餌はムロアジを使う。朝、出航前にオキアミのサビキでムロアジを釣り、船の活間に活かしておく。昔はマグロをミンチしたものを撒き、引っかけて獲った。曳航時に潜航版は使わない。

ナワキリの一本釣りは周年営まれている。夜釣りで、満月の時期は水深二〇〇～二五〇メートル、新月の時期は水深八〇～一四〇メートル付近の浅い層が漁場になる。餌はムロアジを使うが、共食いする魚なので釣った小さなナワキリの身を切って使う場合もある。鱗が光り、ナワキリは餌の光る鱗をめがけて集まるという。針は深く曲がったものを使う。南大東島では祝いの時にナワキリは欠かせない。細かい骨があるので骨切りが料理のコツらしい。マース煮、バター焼きなどの調理に向く。

ナワキリの釣りでバラムツが混獲されることもある。バラムツは脂肪分が多く、その油は昔、カーバイドの代わりに燃やしたこともあるという。ワックス成分があり、大量に食べると下痢をするが、大変美味な魚だ。しかし販売は難しいので、干物にして保存、自家消費が中心のようだ。

儀間さんによれば、釣りは潮を知ることが重要だという。漁師を始めて二〇年そこそこになるが、まだわからないことが多いと謙虚である。

島には水産物の仲買人はいない。したがってセリなどによる売買は行われていない。以前は島内消費だけだったが、一〇年

沖縄本島に出荷する時のダンベ

ほど前から島外に出荷するようになった。水氷を入れたボックスで漁獲物を沖縄本島に出荷しており、本島のローカルスーパーのサンエイと琉球イオンの二社と取引がある。基本的に定期船で出荷するが、船が時化で来ない場合は飛行機で送る。船での輸送には一昼夜かかるので、漁獲してから三～四日後に消費者の手に渡ることになる。価格は本島の相場に合わせている。島内消費はＡコープと飲食店だが、観光客が泊まる「ホテルよしざと」の消費量が最も多いという。

南大東小中学校

南大東島にはハグ上（外輪山に相当）とハグ下（盆地に相当）にそれぞれ周回道路があり、両周回道路をつなぐたくさんの道路が整備されている。漁業組合の前の道がハグ下の周回道路で、こちらを北に向かって走る。在所の集落が途切れたあたりに松林（リュウキュウマツ）に囲まれた公園がある。ここに南大東島を開拓した玉置半右衛門の記念碑が置かれていた。脇に大正一二年に湯川享という人が書いた碑文のパネルも立っていた。碑文の一部を引用しておこう。

「明治歴史中ノ一偉男子ト稱フルニ足ル玉置君半右衛門是ナリ君天保九年十月一日ヲ以テ八丈島ニ生ル齢五十一鳥島ヲ開発シ六十三南大東島北大東島ヲ開発シ六十九ラサ島ヲ開発シ南北大東島ハ今ヤ東洋製糖株式会社ノ所有ニ係ハリ両島ニ居住スルモノ六千人尋常高等小学校在学ノ児童四百四十人内地トノ交通ニハ一千頓級ノ汽船アリ公衆用ノ無線電話アリ六千ノ生霊嬉々トシテ此処ニ其生ヲ楽ム」

また、「教育立村」と書かれた大きな石碑も同じ敷地内に立っ

課外学習から帰ってきた小学３年生

ている。島の子供たちは、中学を卒業する一五歳の時に親元を離れ、島外の学校に進学していくので、村では一人ひとりが自立できるように、幅広い知識と柔軟な思考に基づく判断力や社会の変化に対応する資質や能力、つまり「生きる力」を育成するために「教育立村」を村是としていることによる。「人材をもって資源となす」が南大東村の伝統である。

南大東島小中学校前に設置された島で唯一の信号

公園の裏手に南大東村立幼稚園が置かれ、その隣に村立小中学校がある。公園から集落の方向に少し戻ると、島で唯一の信号があった。その信号の前が小中学校だ。先ほどふるさと文化センターで郷土学習をしていた小学校三年生の一団が先生に連れられて学校に戻ってきたところだった。カメラを向けると次々に集まって来て屈託のない笑顔があふれかえっていた。子供たちに聞くと三年生は二一人いるそうだ。また、小学校全体では八〇人、中学生は三〇人が在籍しているという。

南大東島での学校教育は、島に移住した八年後の一九〇八年に始まっている。八丈島で末吉小学校に奉職していた沖山岩作を初代校長として招き、民家を利用してスタートした。いわば企業の私学校であった。日本は子供のいるところには、必ず小学校を設置した。私企業の島も例外ではなく、日本は伝統的に教育を重視していたことを改めて認識させられる。

大東神社

小学校から盆地の周回道路の内側の道を再び北に走ると、左手に大東神社があった。道路からリュウキュウマツが植えられた参道を進むと広場がある。〆縄の掛かった大きな鳥居をくぐり、両脇に燈籠がならぶ階段を登った先に再び広場が現れ、さ

らに石段を登ると朱色の扉があり、そこに本殿が鎮座する。沖縄県にはもともと神社はなく、神社に相当するのが御嶽だが、南大東島は八丈島の人たちが開拓したので、内地に準ずる神社が置かれているわけだ。

立看板によると、開拓当初はこの山に天照大御神を奉安し産土神として崇め、「大神宮」と呼んでいたという。一九二〇（大正九）年一〇月に社殿並びに拝殿を新築し、伊勢皇大神宮から御新符を受けて勧請した。戦後、大東神社と改称し、例年九月二二、二三日の両日にわたって大祭が執り行われ、奉納相撲、御輿、演芸、仮装行列などの催事も催されている。

神社の階段下に相撲場があり、土俵はシートで覆われていた。この土俵では、毎年奉納相撲と沖縄角力の大会が開催されている。手前の掲示板には歴代大関の名前が掲げられていた。南大東島における相撲は、開拓時代から江戸相撲が青年活動の一環として始められ、大東神社の落成を契機に、化粧回しを付けての土俵入りや相撲甚句による手踊りなどが演じられるようになったそうだ。江戸相撲と沖縄の角力という八丈の風習と沖縄の伝統が融合した文化とも言える。

最初の広場には、藤山雷太が揮毫した「造林記念碑」の円柱が立つ。藤山雷太は藤山コンツェルンを創立し、大日本製糖の社長を務めた人物で、その子息の愛一郎は神奈川県選出の国会議員で六〇年安保当時の外務大臣である。開拓以前の南大東島はうっそうとした森林で覆われていたが、木を伐採し、サトウキビ畑に開発した結果、島は荒廃した。こうした島の環境変化に危機感を募らせたのが、開発の当事者である大日本製糖であり、神社を新築した年に造林計画を定めて樹木の植林を進めた

大東神社の鳥居

のである。神社の周りには日本各地や東南アジアから取り寄せた木々が植えられ、うっそうとした森が再生されている。この森には天然記念物のダイトウオオコウモリがよく集まるらしい。

道路の轢死体

大東神社から自転車で、盆地内の道路を走る。盆地の中心部は環礁の礁湖があったところで、サンゴ礁の隆起に伴ってその跡がたくさんの池となり湿地帯を形成している。この湿地帯の外縁部にサトウキビ畑が広がる。道を走っていて気がついたことがある。いたるところでカエルの轢死体があったことだ。中には野ネズミもいた。

製糖期のこの時期は、サトウキビを積んだトラックが頻繁に走っている。湿地帯に生息しているカエルが道に出てきて無残にも轢き殺されたというわけだ。『南大東島の人と自然』には、湿地の周りに生息するポピュラーな蛙として、ヌマガエル、ミヤコヒキガエル、オオヒキガエルの三種類が記載されているが、大きさから判断してミヤコヒキガエルだろう。三種とも島外から移入されたもので、ミヤコヒキガエルとオオヒキガエルはサトウキビの害虫を駆除するために一九四〇年代に島に持ち込まれた。それ以前にヘリグロヒキガエルも移入された可能性があるが、今はいない。また、一九六〇年代ごろにウシガエルも持ち込まれたらしいのだが、やなり現在は見かけないという。二種類のヒキガエルは、耳腺からは毒液を出すと書かれているので要注意である。

道路に横たわるヒキガエルの轢死体

サトウキビ畑

南大東島の約六割は畑地で（一八〇三ヘクタール）、その大部

分がサトウキビ畑である。一九七〇年以降のサトウキビの収穫面積は一二〇〇ヘクタール前後で推移している。また、サトウキビの生産農家は約二五〇戸で、島の世帯の約四割弱を占める。南大東島はまさにサトウキビの島なのだ。サトウキビ農家の中には、若い人や島外からきた新規就農者もいるという。

サトウキビの栽培方法は、春植え、夏植え、株出しの三つに作型に分かれる。春植えは二月に苗を植えて翌年の二月に収穫する。夏植えは九月に苗を植えて、翌々年の二、三月に収穫する。つまり収穫まで一年半を要するが、反収はその分多い。株出しは収穫後に発生した株を育てる方式で、三～四年間は収穫可能である。株出しは畑を掘り起こすことがないので雨が降った後の赤土の流出が防止でき、環境にやさしい栽培方法といわれている。南大東島の作型別の栽培面積は春植え四〇パーセント、夏植えは四〇パーセント、株だし二〇パーセントという内訳である。ちなみに大東島以外の沖縄県では夏植えが圧倒的に多い。南大東島は春植えと株出しが中心のため、反収が低いのが特徴である。

南大東島のサトウキビの生産量は過去最高が一二万トンであった。近年は五万トン前後で推移し、低迷していたが、今年は一〇万トンほどの生産が見込まれ、歴代二位を記録しそうだという。先に述べたとおり、製糖工場は一二月から稼働しており、四月中旬まで続く見込みだ。サトウキビの単価は政府によって保障されており、近年はトンあたり二万円ほどである。島のサトウキビの生産額は一〇億円ほどで推移していたが、今年は二〇億円ほどに跳ね上がることになりそうだ。このように、サトウキビの反収は台風の来襲頻度や気温などの気象条件によって

刈り取った株から芽を出すサトウキビ

大きく左右される。

南大東島の農地は機械化に対応できるよう圃場整備が積極的に進められ、掘り起こした石灰岩で石垣をつくり平坦な土地が造成されている。島内では、現在でも盛んに圃場整備の工事が行われていた。そして、土地改良の土木工事が一方で島の雇用機会を創出してきたのである。

サトウキビ畑の圃場整備の工事現場

北港と南大東漁港

南大東島は外洋島で、周囲は急深である。したがって、港湾の工事は膨大な費用がかかる。東京都はお金があるので、南大東島と同じような条件にある青ヶ島では長年にわたって突堤を建設しているが、沖縄県ではそれは不可能である。このため、南大東島の港湾は海岸に岸壁を整備しただけの簡素なもので、防波堤も、突堤もない。荒天時には船が係留できないために、風向きにあわせて船ができるように、島には北港、西港、島の南側の亀池港の三つの地方港湾が整備されている。

盆地のサトウキビ畑からハグを登り、外輪山に相当するハグ上から下った先に港があるので、自転車でハグを登ることになる。飛行機から見る限り、島は平坦に見えるが、実際に盆地とハグ上の高低差は相当なもので、ギアチェンジ（六段式）のできる自転車だったが、ローギアにしても自転車に乗ったまま登ることは不可能だった。自転車を押してハグまで登り、そこから再び急坂を下り、北漁港に至る。帰りがまた大変である。港からハグ上に整備された道路まで自転車を押しながら再び登らなければならない。

北港は石灰岩を削り、平坦なコンクリート製の係船岸をつくっただけのきわめてシンプルなもので、桟橋も、防波堤もない。

北港の先には北大東島が見えたが、山がないため、水平線に陸地が少し顔を出しているだけである。外洋のど真ん中に浮かぶ島だから波浪はきつく、べた凪の日などめったにないから、人も物も港に用意してあるクレーンで乗り降りすることになる。南大東島では貨客船「だいとう」の入出港の現場を見ていないが、ケージに入った人間が船から吊り下げられる光景はあまりにも有名である。

北港の西側に南大東漁港が整備されている。直線距離にして一キロメートルほどであるが、海岸沿いを結ぶ道路はないので、いったんハグの上に登り、ハグ上の一周道路に出てから再び海側に降りたところに南大東漁港があった。南大東島の外輪山上には島を一周する道路が整備されているが、こちらの道は大きな高低差が少なく走りやすい。

島には三つの地方港湾がある。何れも北港と同じように係船岸をつくっただけのシンプルなものだが、漁港は石灰岩を掘削しつくられた。大規模な掘り込み港湾としては鹿島灘に面した鹿島港が有名だが、漁港の掘り込み港はこの南大東漁港が最大だろう。八丈島の神港漁港も溶岩を掘削した掘り込み式の漁港だが、そのスケールは南大東漁港には及ばない。

一九八九年一一月に南大東漁港の建設工事に着工し、一一年の歳月をかけて二〇〇〇年一一月に漁港の暫定一部供用が開始された。漁港が整備される前は、島に三つある港湾の何れかからクレーンで漁船を吊り上げて、海に浮かべていた。したがって、船は船外機程度がせいぜいで、大きな漁船は持てなかった。また、自由に出入港できず、操業機会が限られていた。加えて漁船の上下架にクレーンの使用料がかかるなど、漁業の発展を

石灰岩を掘り込んでつくられた南大東漁港

阻害する大きな要因だった。

掘り込んだ高さは深いところでは二〇メートルを超えるだろう。漁港には漁港内に係留されている三トン以上と思われる漁船が一三隻、陸上に置かれた船外機が一四隻、斜路に引き揚げられた漁船が二隻の、あわせて二九隻が確認できた。ただ、漁港の入口に防波堤がないので、船の出入り口が一番の難所で、

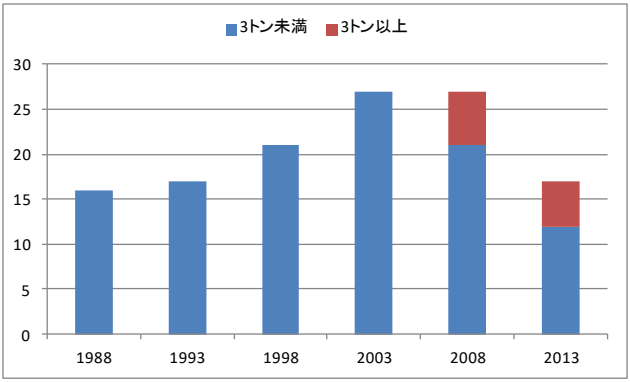


図１　南大東島における漁船数の推移
各漁業センサスより作成

少し波が高くなると外に出ることは不可能だ。このため、入口の静穏度を確保するために、防波堤の工事が行われている。

図１は南大東島の漁船数の推移を示したものであるが、漁港の暫定一部供用が開始されてから二〇〇八年には三トン以上の漁船が増えている。また、二〇一三年には漁船数は減少しているものの、二〇〇八年に向けて確実に漁船数は増えてきた。儀間さんの話では、港ができる前の水揚金額は月に一五～一六万円であったが、現在は四〇～五〇万円になっているという。

西港と上陸記念碑

南大東漁港からハグ上の周回道路を反時計回りに走ると、道路脇に大東ゴルフ倶楽部と書かれた看板があった。ショートコースが一三ホールあるらしい。南大東島にゴルフに来る客は全国のゴルフ場巡りをする好事家以外にはいないと思われる。人口一〇〇〇人強の島で需要があるのか、甚だ心配になってくる。

夕日の広場を素通りし、西港に下る道の途中に地蔵さんが四つ置いてあった。沖縄で地蔵さんは見かけないが、南大東島が東京都の八丈島の人たちによって開発された名残である。解説板には地蔵の一つは明治末期に大沢仁太夫の妻ソイが立てたもので、次のようなことが書かれていた。

「大沢仁太夫は明治三三年一一月に南大東島に来島、あらゆる困苦にたえながら開墾作業に従事、あたかも自分の死を予知していたかのように明治四三年三月二八日にこの世を去った。また地蔵の南側の畑は仁太夫畑といわれ、その中央に屋敷もあった。」

坂の途中には三柱の上陸記念碑が立つ。碑は右から開拓主玉置半右衛門の命により初上陸に成功した第一回洋丸の船長の小島岩松、真中が明治三七年に暴風雨に遭遇して沖縄近海で死亡した故小島岩松と島の開拓に貢献した開拓事務長山田多恵吉の碑、左端が大東島開拓と鳥島爆発記念の碑となっている。この記念碑は明治三七年に立てられたが（当初は小島岩松他乗組員の碑と鳥島爆発記念碑の二本だった）、一九三〇年に現在のコンクリート製のものに建て替えられて三本になった。第一回洋丸が二三人の開拓民を乗せて始めて南大東島の地を踏んだのが一九〇〇（明治三三）年のことなので、上陸から四年目のことであった。なお、この記念碑は大東島製糖によって建て替えられたものである。

この記念碑から坂を下った先が、八丈島の開拓民が最初に上陸を果たした地で、現在は西港となっている。この港にコンテナやクレーンが置かれているところをみると、この季節はよく使われるのだろう。また、ミレニアムパークと名付けられた公園が整備されていて、公衆トイレもある。公園の下には新しく別の大きな護岸が整備されていた。現在のフェリーが係留できる十分な長さがある係船岸である。

水平線に太陽が沈みかけ、その右側には北大東島が横たわる。陽が暮れかけてきたので、再び自転車をハグの上まで押しなが

西港近くに置かれている上陸記念碑

ら歩き、そこからは一気の下りになり、今晩の宿である「ホテルよしざと」までは一直線に走った。

民宿・よしざと

ホテルよしざとの民宿部門に回された事情は先に書いた。部屋は四畳半の和室で、小さなテレビとテーブルがあるだけだ。島は水が貴重なので、少なくとも民宿部門には風呂はない。シャワー施設があるが、一九時に漁師の儀間さんがホテルに来ることになっているので、シャワーも浴びず、エレベーターでホテル四階にある食堂に行った。この島で唯一のエレベーターかもしれない。食堂の窓からは在所の集落が一望できる。

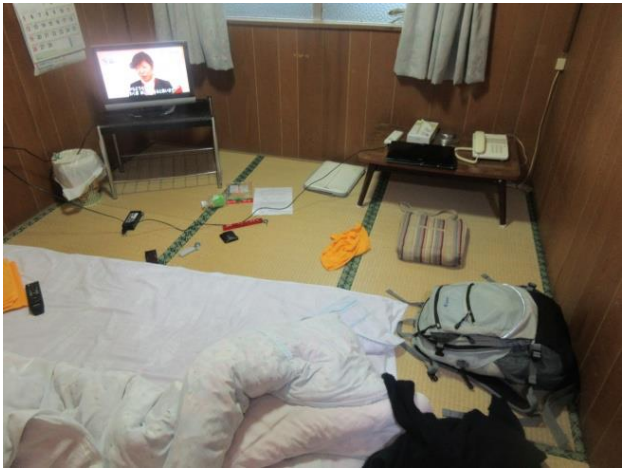
食堂には、クラブツーリズムと沖縄ツーリストの観光客一五人ほどが食事中で、テーブルのほとんどは埋まっていた。この観光客は私と同年輩ないしは年上の高齢者であった。通常の観光地はすでに体験済みの人たちで、秘境の島めぐりがブームになっているようだ。南大東島には、「ホテルよしざと」の他に「プチホテルサザンクロス」「コテージきらく」「ピットイン新城」という農業民宿の四軒の宿がある。ただし、サザンクロスは長期滞在者向けのアパートのような建物で食事は原則として提供していない。また、きらくもコテージなので食事はない。ピットイン新城は空港近くに位置し、島の中心部からは離れているなどの欠点があり、高齢者の観光客が泊まれる宿は「よしざと」が唯一と言っていい。

「ホテルよしざと」は、三〇年前に農協が経営していた民宿を買い取って始めた。島に出張に来た人が泊まる場所がなかったので、農協が民宿を始めたが、農協はいわば役所みたいなと

ホテルよしざとの４階建ての建物

ころなので、従業員は無責任で、結局、経費がかかって採算に合わなかったようだ。よしざとが買い取ってからは順調に発展、一九九九年に現在の五階建の建物を建てるほどに繁盛した。ちなみにこの建物は島の中で最も高い。

夕食は、キハダとカジキの刺身、サワラのソテー、ソーキと島の特産品の南瓜の煮物、ナワキリのアラ汁に、島の特産品である羊羹がついた。一九時に食事を終えて、ロビーで儀間勉さんを待った。団体客は、南大東島の固有種であるダイトウコウモリの観察に出かけて行った。



民宿部門の４畳半の部屋

ロビーで南大東島を紹介した雑誌などに目を通していると、二〇時ごろに儀間さんがホテルのロビーに現れた。儀間さんは、父親の代にサトウキビ収穫の季節労働者として久米島から渡って来て、そのまま南大東島に移住した二代目である。農業を主体に漁業を兼業している。今シーズンはサトウキビが豊作なので、収穫は一二月八日から始まり四月まで続くとのこと。この間は基本的に農業が中心となり、漁業は主として農閑期に営む。また、漁船を保有しているので、漁業の他に観光客を相手とする島周辺のクルージングや遊漁案内もしている。遊漁のマグロ釣りは五時半に出漁し一二時ごろに戻るが、客が要望すれば一五～一八時ごろまで延長するという。さらに、彼は昼食を食べた売店「太陽ぬ家」のオーナーでもある。島出身の奥さんと娘さんがこの店を仕切っている。

儀間さんから、サトウキビのこと、漁業のことを詳しく聞いた。儀間さんは「島に住まわせてもらっていることを誇りに思う」「島によって生かされている」と盛んに話していた。島の周辺は豊富な漁場を抱えているので、このメリットを活かすため

には、漁業を継承する後継者の確保が重要だという。島の子供たちは、高校、大学と進学し、島の外に出て行く。この子供たちが島で暮らせる経済的な環境をつくることが重要だという。儀間さん本人も島外の大学に進学し、島に戻ってきた経験者であるからだ。また、漁協がないために漁業権が設定されていない、補助金の受け皿がないことも問題だという。

二〇一七年二月二二日

ハーベスター

当初、自転車で十分島を見て回れると思ったが、甘かった。ハグは落差三〇メートルほどもあるから、上り坂は自転車を押して歩かなければならない。そしてサトウキビ畑をぬうように道路が網目のように走っているので、自転車では、とても一日で見て回ることはできない。ホテルではレンタカーの事業も営んでいたので、女将にお願いして車を借りた。

ホテルから東に向かい、西港から島を一周するメイン道路（ハグの上、つまり外輪山の上につくられた道路）を反時計回りに走る。塩屋海岸の近くで、ハーベスターがうなり声を上げて、サトウキビを刈っていた。葉を除去し、茎の部分だけを裁断して、並行して走る収穫車に積んでいる。サトウキビの収穫作業はこの南大東島が最も機械化が進んでいる（北大東島も同様）。

サトウキビの収穫は人力に依存していた時代は、製糖期に大勢の労働力が必要だった。開拓以来、八丈系の島民が耕作権を持ち、沖縄系の人たちが季節労働者として働いていた。当初は本島南部からの出稼ぎであったが、その後、北部の人たちが主力となり、さらに宮古島周辺に人たちに移る。そして島民に土地所有権が認められた一九六四年以降は台湾系の外国人が季節労働者になった。ところが日中国交正常化（一九七二年）によって台湾との国交が断絶すると、台湾からの労働者は使うことができなくなり、韓国からの季節労働者で労働力不足を一時的に補った。

そして一九七五年ごろにはハーベスターが導入されて、収穫作業は機械化されることになる。この結果、サトウキビの収穫作業を人力に頼ることはなくなった。しかし、労働力不足をうめる目的で導入された大型ハーベスターは土壌を踏圧し、その結果土壌が硬化、保水力が低下してサトウキビの反収が減少するようになる。また、収穫したサトウキビの葉は焼いていたため、土壌は益々やせることになり、反収が減少した。

このため、一九八九年からグリーンハーベスターが導入された。グリーンハーベスターはサトウキビを刈り取る時にブロア

ーで葉を飛ばし、土壌に還元、茎の部分だけを三〇センチメートルほどに切って運搬車に積み、製糖工場に搬入する仕組みになった。島のハーベスターは農協に八台、法人が六台、個人が四台を保有し、一般の農家は、ハーベスターを保有する組織や個人に収穫作業を外注している。現在の外注費は一トンあたり二七〇〇円である。儀間さんによれば、本島では外注費がトンあたり六〇〇〇～七〇〇〇円が相場だそうだ。南大東島は面積が広く、一戸あたりの平均耕作面積は八・二ヘクタールなので、作業効率がよく、その分、安く済んでいるという。

ハーベスターによるサトウキビの収穫作業

家畜の飼育とサトウキビ栽培を組み合わせる有畜農業が導入できれば、畜産廃棄物を農地に還元してサトウキビの生産を高めることができる。こうした観点から南大東島でも子牛の生産を手がけたことがある。しかし、本土まで子牛を運ぶのに一四時間以上もかかるため、牛はすっかり船酔いしてしまい、食欲不振となり、南大東島では有畜農業は断念したそうだ。現在は、農地が痩せるのを防止するため、本島から堆肥を入れており、またクロタラリア（草丈一・五メートルほどのマメ科植物）や大豆などのマメ科植物を導入している。サトウキビの輪作体系の一環として、馬鈴薯を導入（のちの南瓜）したのはこうした理由からだ。

南区

ちょうど島の南側に亀池港がある。その脇に小さな漁港区があり、船溜まりが形成されていた。島には浜はなく、石灰岩の断崖絶壁に取り囲まれている。港は時化ているためか、立ち入り禁止になっていた。陸には船外機五隻が引き揚げられている。

近くに風力発電が一基立っており、盛んにプロペラが回っていた。

亀池港から再びハグ上の島内一周道路に戻り、反時計回りに車を走らせると、日の丸山展望台に至る。昭和初期に南地区の青年団がこの山を集団活動の拠点とし、日の丸の旗を掲揚して一日の活動の合図としたことから、日の丸山と呼ぶようになった。戦時中は軍の部隊の陣地が置かれ、島の防空に重要な役割を果たしたという。海抜六三メートルの地点に立つクリーム色塗られた展望台からはハグ上の林と環礁内の農地を一望でき、島の地形の理解に大いに役立つ。

日の丸山展望台

旧東区と新東区

同展望台から南大東島の北側を望む

日の丸山展望台からハグ上の道を反時計回りに旧東区に向かう。途中の道路脇にビロウの木があった。それぞれの木に番号を書いた標識が付けられていることから、保護しているのだろう。ビロウはかつて南大東島を覆っていた樹木であり、大東諸島の固有種である。しかし、サトウキビ畑に開墾するため、ほとんどのビロウを伐採してしまった。ビロウは建築材として使われ、さかんに島外に移出されたという。また、ビロウの葉は家の屋根の材料として使われていた。

ハグ上の周回道路をさらに反時計回りに進み、「海軍棒」と書かれた看板を海に向かって進むと、海岸の石灰岩を掘って作った海水プールがみえた。あいにく、潮位が高く、波浪も高かったことから、プールの縁ははっきりしなかった。南大東島には、砂浜が全くなく、しかも海岸線は険しい崖が続くので、島でありながら海で泳ぐ機会に恵まれなかった。このため、海岸に人工的なプールをつくったのだろう。なお「海軍棒」という地名は、一八九二（明治二五）年に佐世保鎮守府海軍司令官の命により軍艦「海門」が大東三島を探検、測量した時に起点として建てられた「棒」に由来する。ちなみに南大東島が日本の領土となったのは一八八五（明治一八）年のことである。明治政府が派遣した林鶴松を艦長とする出雲丸から降ろされた小舟で南大東島の北東岸に上陸し、ここに国標を建立し、日本領土と宣言した。新東区の海岸にある国京下がその場所である。

旧東地区でも畑地の圃場整備が行われていた。赤土の下に石灰岩の層があり、掘削機で岩盤を掘り、圃場の石垣として利用し、赤土を再びかぶせて平坦にする。

新しい南大東空港は、旧東区と新東区の間にまたがっている。

保護されているビロウの木

空港の周りもサトウキビを中心とする畑で、ところどころに農家が点在する。南大東空港はハグ上に整備されたもので、一九九七年七月に完成している。滑走路の長さは一五〇〇メートルである。以前の空港は盆地の中央にあったが、滑走路の長さが八〇〇メートルしかなかったことから、ＹＳ２１が発着できなかったといわれている。ちなみに南大東島の飛行場は海軍が一九三四年に建設したのが始まりである。

島の東海岸の地形

空港の脇に農業民宿「ピットイン新城」があり、月桃を用いたカゴ（ソーカカゴ）をつくる工房もあった。

南瓜

「ピットイン新城」の脇の南瓜畑で摘果作業をしている五〇歳代とおぼしき男性がいた。「月桃はこの辺にあるか」と聞いたところ、生えている場所を教えてくれた。写真を撮ってから再び元の場所に戻り、南瓜のことを聞いた。

南大東島における南瓜栽培の歴史は比較的新しい。サトウキビの輪作体系として最初に導入されたのが馬鈴薯であった。馬鈴薯を栽培すると土地に堆肥が入っているので、その後にサトウキビを植えると生長がいい。しかし、馬鈴薯よりも南瓜の方が単価がよいから、近年、馬鈴薯に代わり、南瓜が輪作体系の主力になっている。南瓜は一〇月に植え付けると二月には収穫できるので、全国で最も早く収穫できることから東京・築地で、高値で取引されている。図２は馬鈴薯と南瓜の生産額の推移を示したものだが、近年は南瓜の伸びが顕著で、二〇一四年の出荷額は一億円を突破している。馬鈴薯はほとんど栽培されなくなり、南瓜が圧倒的に増えてきた。盆地の地形は放射冷却があ

り、南瓜の栽培には適しているようだ。

栽培している南瓜の品種は様々である。「デイデイ」という品種が最も高いという。この他に「ほっとけ栗たん」「えびす」などの品種が導入されている。それでもキログラムあたり、二〇円ほどの差しかないという。

南瓜の間にはソルダンが植えられている。風よけと土地改良（マメ科植物なので肥料にもなる）を兼ねている。南瓜の蔓は一定方向に誘導して止められ、一株に一個だけ、しかも先端部に実を生らせる。他の実は全て摘果することによって大きな南

南瓜の整枝と摘果作業をする人

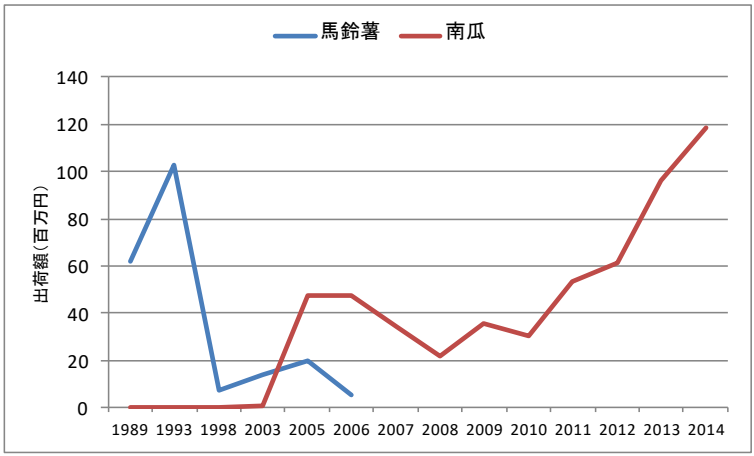


図２　　南大東島の馬鈴薯の南瓜の出荷額の推移

「平成 28 年南大東村村勢要覧」より作成

瓜を収穫できるという。この農夫は、昨日は船で三トン分の南瓜を出荷したそうだ。平均重量は約三キログラムだったという。大きい南瓜であれば、四～五キログラムになる。昨日の売価はキログラムあたり四二〇円だったというから、一個一二〇〇円を超えている。

南瓜の受粉には蜂は欠かせない。島に蜂が生息しているのか疑問に思って質問すると、沖縄本島から巣箱に入った蜂を取り寄せているという。一箱一八〇〇〇円もする。蜂は二キロメートル四方に飛び、夜巣箱に戻る。南瓜の花に来ていた蜂をみたが動きが早く十分観察できなかったが、ミツバチよりも少し体長が長いように見えた。

島で栽培されている農作物は、南瓜の他に、タマネギ、パパイヤがメインで、タマネギは島では一個一キログラムもする巨大なものが獲れるという。タマネギとパパイヤの植わっている畑を教えてもらって見に行った。パパイヤは青い実がたわわに実り、タマネギもすでに収穫サイズに生長しており、収穫まじかであった。また、近くにはトウモロコシも植わっていて、すでに実をつけていた。

月桃と羊羹

南大東島の特産品カタログには、普段見慣れないものがある。月桃（げっとう）という植物である。島の方言でソーカという。南大東農村漁村研究会がつくっている「あっソーカ」という月桃を生地に練り込んだ「かりん糖」、太陽ぬ家でつくる「月桃ボール」というサーターアンダギーのような揚げ菓子、さらに月桃の茎を干して編んだカゴなどである。月桃とは如何なる植物か？

そんなわけで南瓜畑にいたおじさんに自生している場所を教えてもらった。南瓜畑のはずれに月桃があった。写真を撮る。月桃はショウガ科ハナミョウガ属の多年草で、島の至る所に生えている。サトウキビを手作業で刈っていた時代は、収穫したサトウキビの結束に用いた。黄色の花が咲き、実ができる。儀間さんの話では、パプアニューギニアや台湾などから移入されたという説があり、沖縄本島のものとは異なり、南大東島の月桃の方が、芳香が強いという。島旅から戻って調べてみると、どうやら南大東島と北大東島に分布する月桃はタイリンゲットウという種で、台湾北部原産と沖縄本島産の交配によって生まれた亜種ないしは変種のようだ。サトウキビの結束材料として、導入されて定着したものと考えられる。しかし、ハーベスターの導入によって結束材は不要になり、需要がなくなった。島内に分布する月桃の活用が求められ、新商品開発に取り組んだ結

果生まれたのが上述の特産品なのである。ちなみに隣の北大東島では、月桃の葉を蒸して精油を抽出し、化粧水など様々な商品を作っているという。儀間さんは北大東島にアイディアをとられてしまったと悔しがっていた。

月桃の葉には独特の芳香があり、ポリフェノールが豊富に含まれていることから、南大東島では上述した菓子に活用されている。また、帰りに空港の喫茶店で食べた田芋のおやきも、この月桃の葉で包まれていた。

南大東島空港で食べた月桃の葉で包んだ田芋のおやき

お菓子といえば、南大東島を代表するのが羊羹である。島内の三つの店で、四種類の羊羹が手づくりでつくられている。塩黒糖、あずき、抹茶、えんどうの四種類であり、南大東島の土産物として定着している。昨晩、ホテルの夕食にもついてきた。沖縄には羊羹の食文化はないので、南大東島を開拓した八丈島の人たちによって伝わったものだろう。

北区

南大東島の観光地図をみると、空港の北側にノエビア南大東海洋研究所と書かれたところがある。ノエビアとは化粧品の会社のはずだが、いったい何をやっているのだろう。

農地を抜け、細い道の行き止まりに二階建の瀟洒な建物が建っていた。敷地にはきれいに芝が張られ、生垣にハイビスカスが植えられている。近くにいた女性が車に乗って出かけて行ったが、人がいる気配はない。島旅から帰って調べてみると、水深二〇〇メートルから海洋深層水を汲み上げ、塩の研究をしているようで、作った塩がバカ高い値段で売られている。また、瀟洒な建物は二〇〇二年に竹中工務店に設計を依頼し、同社が

建てたことも判明した。ノエビアの海洋研究所は加計呂麻島の南の与路島にもあるので、島好きの創業者の道楽かもしれない。

再びハグ上の島内一周道路に戻り、北に向かう。昨日訪ねた北港に至る少し手前にバリバリ岩がある。大きな岩が切り裂かれたようになっていることからバリバリ岩と呼ばれたのだろう。岩の割れ目にビロウの木が育っていた。この割れ目を抜けて崖を下ると海に出る。途中まで行って引き返した。入口の案内版には、「南大東島はフィリピン海プレートに乗って一年間に七センチメートル北西方向に移動している。その証拠」がこのバリバリ岩だと書いてあったが、真偽のほどは分からない。

南大東島は礁湖が隆起した島なので、島の中心部には水が溜まり、池や湿地ができ、いわゆるカルスト湖沼群を形成してい

地殻変動によって形成されたバリバリ岩の割れ目

カルスト湖沼群のうち最大の大池

る。最も大きな池は、そのものずばり「大池」と呼ばれていて、地図をみるとその端に展望台があることになっている。しかし、サトウキビの収穫作業をしている人に聞いてもその場所はわからない。サトウキビ畑の中の未舗装の道を彷徨い、さんざん探してようやく目的地に達した。

池の周りは樹木で囲まれ、展望台がそれほど高くないことも重なり、木立の間からやっと大池を確認することができた。大池の水辺にはオヒルギの群落が形成されている。オヒルギは陸封型のマングローブである。マングローブは海水が混ざる汽水域に生育するが、南大東島の礁湖は隆起によって淡水化しているので、こうした環境に適応した形で進化したのだろう。

池ノ沢区

島の西側一帯が池ノ沢区である。西港と上陸記念碑が置かれているところからわかるように、八丈島からの開拓民が最初に住み、開拓を開始した地域である。ハグ上の周回道路から一本盆地側に下った道沿いに星野洞という鍾乳洞がある。

南大東島は隆起サンゴ礁の島なので、当然、鍾乳洞が発達している。これまでの調査で島内には二〇〇以上の鍾乳洞が発見されているが、その中で一番大きいのがこの星野洞である。ちなみにこの土地の一帯が星野さんという方の土地だったことから、星野洞と名付けられた。

観光客が多いわけではないので、入場時間は午前（九～一一時）と午後（一四～一六時）の二時間ずつである。下手をすると係員がいない可能性もあるが、この日は「ホテルよしざと」に泊まっていたツアー客がいるので、間違いなく開いているだ

星野洞と名付けられた鍾乳洞の入口

ろうと思い、事務所を訪ねると、昨日役場で会った林業担当の職員がいた。入場料八〇〇円を払い、中に入った。鍾乳洞を一〇ポイントに分けて、ポイントごとに解説してくれるが、その解説を録音した機材を貸してくれた。この星野洞は一九九四年に整備されたものである。

星野洞は一〇〇〇坪ほどの面積があるらしい。ライトと機材を持ち、鍾乳洞の入口から地底に下る。洞内には階段が整備されていて、足元は照明もあり、歩くうえでは不自由しない。解説を聞きながら、三〇分ほど鍾乳洞を観察した。洞内は温度と湿度が高く、むっとする。出口までの上りはゴルフ場にあるのと同じベルトコンベアが整備されていた。

星野洞から盆地内の周回道路に出て、島のほぼ中央部にある旧飛行場に向かう。

ラム酒

旧南大東空港は一九九七年まで使われていたが、その旧ターミナル施設の跡にラム酒の醸造所がある。㈱グレイス・ラム（本社：那覇市）が二〇〇四年から南大東島で獲れるサトウキビを原料とするラム酒づくりを始めた。この醸造所の杜氏である玉那覇さんによれば、日本国内でラム酒をつくっているところは、南大東島の他に、伊江島、沖縄本島の名護、徳之島、鹿児島市、滋賀県、埼玉県、そして東京都の父島の合計八カ所だという。

ラム酒はサトウキビを原料とする蒸留酒である。この醸造所では二種類の製法でラム酒がつくられている。一つはサトウキビの搾り汁を直接原料として発酵させたもので、「アグリコール・ラム（農業生産ラム）」と呼ばれる。サトウキビは刈り取っ

ラム酒の蒸留器と貯蔵タンク

た瞬間から加水分解やバクテリア発酵が始まるため、「アグリコール・ラム」の醸造所はサトウキビの栽培地の近くに限定される。もう一つは製糖工場の分蜜糖製造の副産物で出てくる糖蜜を発酵させたもので、「アンデュストリエル・ラム（工業生産ラム）」と呼ばれる。こちらは従来から作られてきたラム酒の典型だ。前者はサトウキビの産地でしか醸造できないので、価値が高い。「アグリコール・ラム」の醸造は、製糖シーズン、つまり一～三月ごろであり、糖蜜を原料とする「アンデュストリエル・ラム」はこれ以外の時期となる。

ここでつくられるラム酒は四〇度が標準だが、水で希釈した二〇度のものもある。容量は七二〇ミリリットルと三〇〇ミリリットルの二種類あり、七二〇ミリリットル入りの「アグリコール」が四四二二円、「アンデュストリエル」は三一八八円である。

杜氏兼責任者である玉那覇さんは沖縄本島出身で、酒造り四五年のベテランである。これまでに日本酒の造り酒屋に二年いて、その後、泡盛、ワインなどの酒づくりを手がけてきた。今の社長が㈱グレイス・ラムを立ち上げるにあたってスカウトしたらしい。玉那覇さんの他に三人のアルバイトで、この工場を運営している。ちなみに社長と営業担当は本社の那覇にいる。

玉那覇さんに工場を案内してもらった。

工場の中央に蒸留釜が置かれて、その左が発酵槽、右が蒸留したラム酒の熟成タンクである。何れもステンレス製のものが使われている。ラム酒の熟成にはオークの酒樽が使われるが、こちらはステンレス製なので、酒は透明である。ちなみにラム酒がウイスキーと同じ琥珀色をしているのはオークの樽に長年

ラム酒杜氏の玉那覇さん

貯蔵しているためだ。この醸造ゾーンの手前の部屋に瓶詰機が置かれている。

ここの醸造所では、「アグリコール」と「アンデュストリエル」を七二〇ミリリットル換算でそれぞれ二万本ずつ生産している。インターネットや口コミで直接注文してくる人が中心だが、顧客の二割はヨーロッパ人とのことで、鮮度の高い原料を使った「アグリコール」はヨーロッパ人に人気があるようだ。ヨーロッパには船便で送るそうだ。

レンタカーを運転しなければならないので試飲はできず、香りだけを嗅いだ。玉那覇さんによれば、両種は味も舌触りもまるで違うとのことだ。お土産に「アグリコール」の七二〇ミリリットルと三〇〇ミリリットルをそれぞれ一本購入した。なおラム酒の他に、ラム酒入りのケーキも売られていた。

ラム酒の醸造所に近接して南大東村ビジターセンター・島まるごと館が置かれている。サンゴ石で外観を固めた開拓当時を思わせるユニークな建物だ。ただ、海岸時間は星野洞と同様、午前中は一一時まで、午後は一一三時からとなっており、扉が閉まっていた。

続いて秋葉神社を訪ねる。盆地の東側の標高四一メートルの小さな丘がサトウキビ畑の中にあり、この頂上に秋葉神社がある。新東区と旧東区の境あたりに相当する。盆地内の周回道路から秋葉山に向けて参道がまっすぐに伸び、両側にフクギが植えられていた。ただ植えてから日が浅いようでまだ幼木であった。神社の階段を登ると秋葉大権現を祀る神社であるが、ただ石塔が立つだけで、いわゆる神社の建物はない。

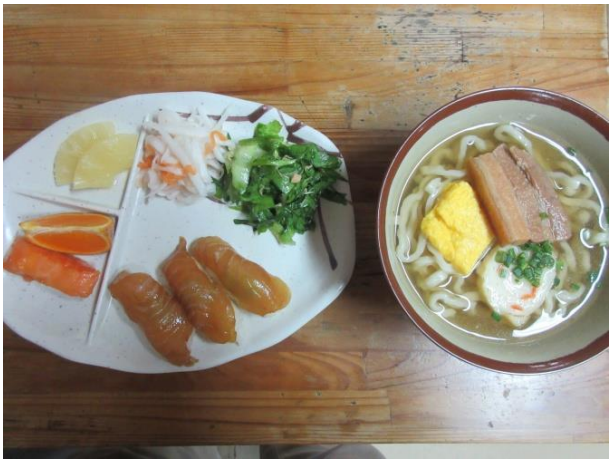
大東そばと大東寿司

月見池と瓢箪池に架かる月見橋をわたると在所の市街地に入る。ホテルよしざとの前にある富士食堂で昼食を食べることにした。「大東そば」と書いた看板がかかるだけの古めかしい建物で、営業しているのか、していないのかわからない。ところが店の中に入って驚いた。店内は客でいっぱいだったのである。例のツアー客と仕事で来た人と思われる人が座席を占拠していた。外からはわからないが、店内は奥が深く、広い。奥のテーブルに腰かけた。

この店は年中無休である。メニューは大東そば、ソーキそば、大東そばセット、バイキングと限られている。バイキングは、バットに入ったおかずを自由にとるシステムで、豚の耳、ミドリイガイ、サバの煮付け、卵焼き、カマボコ、ランチョンミートなどが並んでいた。こちらは飯つきで七〇〇円だ。店に入る

前から大東そばと大東寿司を食べることに決めていたから、大東そばセット（一〇〇〇円）をたのんだ。この店の定番メニューで団体客もこちらを食べていた。両方とも沖縄ではよく知られた存在であるが、本家本元の大東諸島で食べられるのはこの店だけだ。

大東そばは「沖縄そば」とあまり変わらないがそば自体が太く、うどんのような感じの縮れ麺だ。具としてラフティーとカマボコ、卵焼きがのっていた。大東寿司は、八丈島周辺で食べられている鮮魚の切り身のヅケをネタにした握り寿司で、八丈寿司と同じものである。つまり、八丈島と沖縄の食文化が融合したのが、まさに大東そばセットといえよう。セットにはレタスと缶詰のシーチキンの和え物、大根とニンジンの鱠、パイン、



大東そばと大東寿司のセット

団体客でにぎわう「大東そば」の店内

タンカン、そしてどういうわけかよく熟した柿がついた。

周辺には一〇軒ほどの飲食店や居酒屋、スナックなどがあるが、少なくとも昼は営業していない。おそらくサトウキビの収穫期に大勢の季節労働者が島に来た時の需要に対応して飲食店ができたものらしいが、ハーベスターの普及によって、これらの商売は成り立たなくなり、なかにはやっていない店も相当あると思われる。昨夜、儀間さんに話を聞いてから、夜の南大東島を取材することも可能だったが、こちらに来る前に目だし帽をかぶったことが原因で顔がかぶれ、抗ヒスタミン剤を飲んでいたこともあり、外出する気力がなかったのである。

ビジターセンターの午後のオープンまで時間があったので、食事を終えてから、島の南側をドライブ。一三時過ぎにビジターセンターに行ったが、開いていなかった。客がいないためだろう。入口に書かれた電話番号に電話をすれば、開けてくれるようだったが、時間もあまりないので断念する。ホテルに戻ってレンタカーを返却した。

万歩計のボタン電池が切れそうになったので、歩いて小中学校脇にある電気屋にボタン電池を買いにいった。電気屋に行く間にビリヤードやスロットマシンの店もあったが、今はやっていないようだ。サトウキビ刈りの季節労働者が多い時代は、さぞかし賑やかだったと想像される。

精算を済ませ、一四時にホテルのご主人が運転する車で空港まで送ってもらった。空港の喫茶店で、月桃の葉で包んだ田芋のお焼きと紅茶をすする。一五時二五分の飛行機で次の訪問地・北大東島に向かった。

【参考文献】

中井精一・東和明・ダニエル・ロング編著（二〇〇九）南大東島の人と自然、南方新社、鹿児島、pp二四三.

大沢夕志・大沢啓子（一九九七）南大東島自然ガイドブック、ボーダーインク、那覇、pp.六三.